九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『とりかへばや』の研究 : 伝本と読解をめぐって

千葉, 直人

https://hdl.handle.net/2324/7182263

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	千葉 直人
論　文　名	『とりかへばや』の研究 ―伝本と読解をめぐって―
論文調査委員	主　査　九州大学　准教授　岡田　貴憲 副　査　九州大学　教授　川平　敏文 副　査　九州大学　教授　青木　博史 副　査　九州大学　教授　静永　　健

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、平安時代後期に成立した作り物語『とりかへばや』を対象として、物語内容と本文資料の両面に跨がる多角的な視点から、総合的な作品分析を試みたものである。現存諸本の系統を再分類する第一部「『とりかへばや』の伝本（第一～二章）」と、作中表現の狙いを考察する第二部「『とりかへばや』の読解（第一～四章）」との二部から成る本論文は、先行する平安後期物語『御津の浜松』を対象とした応用研究を付論として加えた、全七章により構成される。このうち、第一部第一章は学外査読誌の『國學院雑誌』、付論は国内学会誌の『西日本国語国文学』に掲載済みであり、書き下ろしである第一部第二章を除き、他章もすべて学術論文として公表済みの成果に属する。

第一部では、第一種から第四種の四系統に分類されている『とりかへばや』の諸本系統のうち、系統内の伝本関係が未整理であった第三種・第四種に着目し、未考究の伝本や複数の新出伝本を駆使して、各系統の派生関係を定めた。第一章では、これまで第一種とほぼ同系とされてきた第四種の諸本が、第一種・第二種と対立する共通異文を有しつつ、系統内で第四種第一類と第二類に分岐することが明らかにされたほか、第三種の派生元が第四種第一類と考えられること、および上記四系統とは別に扱われてきた「異本系統」の伝本が、第四種第二類の末流に位置づけられることも見通しとして得られた。続く第二章では、国学者・山岡浚明による校勘本の系統とされる第三種が、浚明署名の差異と連動する本文異同によって「宿祢本」と「明阿弥本」に大別できること、そしてそれらの差異が、単一の親本（＝浚明自筆本）における注釈・校訂作業の各段階を、直接反映した結果とみられることが推定された。これらの結果は、従来の四系統分類に是正の必要があることを示唆するとともに、近世期における「異本」派生や校訂本作成のあり方について具体的な事例を提供する点で、作り物語全般の研究にも関わる意義深い成果と目される。

他方、作中二箇所の漢詩句引用を取り上げ、典拠の詩語から喚起される象徴性と、その作中場面への投影度を探ろうとした第二部第一章・第二章は、いささか論理の一貫性に欠ける嫌いがあり、着眼点は重要ながらも説得力に問題が残る。しかしながら、この二章はいずれも本論文中では初期の成果に属すること、そして続く第三章では複数作品からの引用がもたらす効果という、新たな視座による研究手法の進化が看取できることから、本論文における引用論の価値は必ずしも毀損されるものではない。作中に二度あらわれる垣間見場面が、ともに『夜の寝覚』にみられる同趣場面の引用からなり、かつ二度目の場面では『夜の寝覚』の源泉たる『源氏物語』橋姫巻の同趣場面へと回帰することで、読者のミスリードを誘うことを説く第三章の見地は、『御津の浜松』の人物造型における『源氏物語』引用が、当該人物の関係場面を想起させることで構想の糸としても機能することを示した付論へと発展しており、本論文で『とりかへばや』を対象に培われた表現研究の方法が、

『源氏物語』の影響下にある平安後期物語・中世王朝物語へ広く援用可能となることを表す。また、第四章では引用論を離れて不審本文改訂や文脈理解修正へと考察を及ぼしており、注釈書に恵まれているとは言いがたい『とりかへばや』の読解面に潜む、基礎的な問題を炙り出している。

以上のように本論文は、これまで主題の珍奇性や、『源氏物語』を初めとする先行作品との表現類似において注目されがちであった『とりかへばや』について、作品内外の未検討課題を推し進めて新たな研究価値を提示したものと評することができ、今後の研究進展に期待される所も大きい。よって、本調査委員会は、本論文を提出した学位申請者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。